

NEW! R.F.C+M Report

リスク・ファイナンシャル・カウンセリング+マネジメント レポート ===== 2008年12月号

◆冬至の日は1年の終わりの日?

今年の12月21日は冬至です。1年で最も昼間の時間が身近い日です。冬至の翌日からは陽の出る時間が少しずつ長くなり夏至(6月21日)を境にして再び来年12月22日の冬至の日を迎えます。

この日、東京・早稲田にある“穴八幡宮”には「一陽来復」(イチヨウライフク)のお札を買い求める人で賑わいます。「一陽来復」の「復」は「福」ではなく「復」の文字であるのは復活の意味があるからです。

古くから中国に伝わる「易経」のなかに“陽の気”と“陰の気”の現象について書かれています。“陽の気=良い運氣”とし“陰の気=悪い気”と考え、それが繰り返されているとあります。

夏至の日をピークにして秋~冬~春~夏と季節が繰り返すように“冬至の日=一陽来復”として、逆境もこの日を境にして、太陽パワーが増す陽の気がふたたび復活するというのです。

◆晴れ空はやがて崩れ…雨降りは必ず晴れる

「易経」の中に“亢龍悔いあり”という言葉があります。頂点を登り詰めたものは下るほかない…というのです。イケイケドンドンで頂点を極めたものは…やがて落ちていくしかないと忠告している言葉です。

難しいのは、「どこが頂点なのか?」「いつが頂点だったか?」がなかなか分からないことなのです。

快晴の青空が、いつまでも青空であり続けることはなく必ずいつか崩れ雨が降る。たくさんの社員を抱えて、業界一番の規模になり“栄華を極めた絶頂のとき”のその企業のどこかに…“衰退の兆し”が芽を出しているというのです。

逆に言えば、土砂降り雨の日が何日続いていても、必ず晴れの日が来るということなのです。地球的規模の不況に翻弄されていても現状がいつまでも続くことはないということですが、いつになったら開けるのか気がかりでもあります。

「易経」の中で、登りつめて栄華を極めている現象や人々の姿を、天高く悠々と泳いでいる龍に例え“飛龍”と呼んでいます。

そして、“飛龍”となって調子のりすぎると、やがては“亢龍”になり、よほどのことがない限り飛龍には戻れなくなり、結果として悔やむことになるというのですから、大変なことです。

業界のリーダーとなる人々が、規

リスク・カウンセラー奮闘記・55

模の拡大や栄華を目指し、そして…それを誇っている姿に、嘆かわしささえ感じるのは私だけでしょうか。

そういう人々は、気が付いたときには一気に衰退の道を進むことになるという戒めだそうですから、お互いに十分に気をつけなければいけませんね。

◆明るい兆しがあるのに気づかない人

過去の私自身がそうであったように、事業の活力が崩れてくると、見えていなければいけないものが見えなくなってしまうことが多いものです。

とくに、問題に押しつぶされそうになったり行き詰まったときにこそ、冷静になり周囲の人の言葉に耳を傾け、出来るだけ客観的に自分を見つめていくことによって次々と打つべき手が見つくて、新たな活路が開けていくものです。

ところが、苦境にぶつかり絶望的になる人に限って、今までの自分の経験値だけで判断し、周囲の人からの言葉には耳を傾けず、何を提案されても「それはできない!だって…」 「そんなコトしたことない!だって…」と、出来ない、したくない理由をツラツラと並べ立てて、何時間もかけて話し合いをしても結局は何の結論も出ないままになっています。

ひどい場合は、自分の思い通りに行かないことを、それまでに関係してきた人や相談した相手に対して、自分を理解できない頼りにならないヤツとして、ミソクソに悪たれを言い逆恨みさえする人もいます。

残念なことに、そんな人は、明るい兆しがあることを周囲の人が教えてくれているのだとは思えないのでしょうか。

年末が近づくと、電車が「人身事故のため不通」になったということを知ると、「もしや?!思い余った人か?」と、問題を解決できまます事務所を出て行った人のことを思い浮かべてしまいます。

死ぬ勇気があったら…と、思ってしまうのは、自ら命を絶った人に対する伝えきれない何かがあったか、主訴を聴いてあげられなかったのかを悩み苦しむところです。

先週、友人のご主人がご相談にいられて、お会いした翌日に同じようにして亡くなられました。その一報を耳にしたときから、筆舌には尽くしがたい動揺が今でも残っていて消えません。

残されたご家族のことを思うと、さらに胸が痛みます。どうしてさしあげれば死なないで済んだのだろうか…。

このことは逐語記録を起こして自省材料とすることが大切なのかも知れません。ご冥福をお祈りいたします。合掌。



●左か…右か…、どちらを選ぶか

「江戸を起点とし旧中仙道を歩き、本郷を過ぎると駒込村にさしかかる。その地は“駒込追分町”と称し中仙道と奥州道の岐るゝ所を以て斯く名付けたり。」

左を行けば中仙道となり板橋村、本庄を通り京都に至る。右を行けば王子村から岩槻を通り中尊寺から青森に至る。

追分とは馬車や牛車で街道を往く時、分かれにさしかかったときにどちらの道に往くかを決めて馬や牛に左右のどちらにするかを追い分けていたところから由来しています。

私たちのこれまでの人生でも、生まれたときから右か左かを決定され、そして自己判断ができるようになると自ら決定し、生涯に亘って何千百万、何億、何兆、何京回の選択を繰り返して、やがて死んでいくことになるのだが、考えてみれば、コンピューターのフリップフロップ(FlipFlop)回路のように驚くほどの早さで反応し、身体の60兆個の細胞に瞬時にその情報を送り届けているのだから人間の身体は“不可思議”(10の64乗の数字のこと)でならない。

瞬間瞬間の判断が自分の前に道を作り上げ、その道を進むことで大きな感動が体感できるというものです。

しかし、そんな“不可思議”な能力を持っている人間なのに、何でつまらない過ちを何度も繰り返してしまうのだろうかと考えさせられる。

あれこれと深く考えてみたところで、所詮は2つの中から1つを選択することを繰り返し生きてきた人生だとしたら、なりゆきに任せ、人がダメだということを止めて、大自然の摂理に従うということなのだろう。

●困ったときは…神だのみ?

“人生は糾える縄のごとし”と言うように「悪いこと」に出会うのと同じ数だけ「良いこと」にも出会うというのですから、右往左往して必死になってどちらかを選択しなければならぬということも必要もないのかも知れません。

「自分は不幸だ」と思い続けて人生を嘆き悲しんでいる人は「自分は幸せだ」という状況がすぐ隣にあたりすることに気づかないまま過ごしているのではないでしょ

うか。誰かが何とかしてくれるだろうというような他力本願の考えでいる人は、人間が持っている“不可思議”な力が働いていないのだから何かを成し遂げたという大きな感動もない。

そして、そういう人はトラブルに直面してもその原因が自分にあるとはは周囲には全く思わず、ほとんど他人のせいにしてしまう困った人たちです。誰かに相談したとしても、おそらく何も結論を導き出すことはできないだろうし、行動に移すことができないのも当然のことなのかも知れません。

せっかくそうしたすばらしい能力を持ちながら、自分の意志で結論を出せない人は、どちらかと言えば服装もルーズで、メタボで、タバコやパチンコから抜けられない擬似的なウツ病となってしまう。60兆個の細胞は活力を失い、自分から病気を呼び込んでいるのかも知れません。

そんな人が問題にぶつかったときは、いっその事“神だのみ”をすることが良いのかも知れません。誰を傷つけることもなく、誰を恨むこともなく、それを運命と受け止めて生きていくことができるかも知れません。

●迷ったときは“困難そうな道”を…

靈感師であり易占家であった母は、子供たちが結論を出せなくて悩んでいると決まってこう言っていた。「迷ったときに楽な方を選択するとロクなことにならないよ。困難が多く大変そうで、人がやりたがらない嫌な方を選んでいけば間違いはないんだから…」と、子供たちには口癖のように繰り返していたことを思い出す。

いま思うことは、トラブルに直面したときに問題を正面から受け止め解決していく「二者択一」の“直感力”が養われてきたことと、他人からは“大変なこと”と見えることでも、自分ではそれを“大変なこと”とは感じないでいられるだけでも有り難いことだ。

“楽な方を選択する”ということは、“問題解決能力”が養われないままが人生を送るということであって、せいぜい自分の頭の上の蠅を追うことで精一杯の人生で終わることだろう。

それでは何の感動もないし、社会の誰かにお返しができないまま終わる人生にはしたくはないものだ。

人生は「二者択一」のくり返し
迷ったときには「困難そうな道」を選ぶ
リスクのクヌリ



思らば木をてにあしの中きはの花一れ紋りのの
いけつ瓜囲近い進る幹て植園な美幹も言先た一と紅花は歌
出にてのう道た入のや利物か果しは納葉駆馴とし、なあの
しなく生よをの禁で枝用でら実く荒得が者染した白、だび
ます。たり垣にるし用の固れが来付憐しまけの古弁紅か、
少抜を植たうよに畔くいて、しけでくわ、指るか一の。
年け這えめか植、太ま鎮たるて、れ導花か一の。
時、いらに?え生いす。咳ら古固も、て者で織しつ
代傷つれ、らけ棘。刺らくく、いす。好田つ
をだくた畑れ垣がと科は大花るの。ま家か

磯影の池水(いけみず)
見ゆるままでに
さ照るあしでの
散らまく惜びの
(甘南備伊香真人)

ちよつと歳時記

◇発行者 株式会社 ホロニックス 総研
◇責任者 代表取締役・リスクカウンセラー 細野 孟 士
◇連絡先 〒113-0033 東京都文京区本郷1-35-12
TEL. 03-5684-0021 FAX. 03-5684-0031
<http://www.holonics.gr.jp>
【ホロニックス】
(英: Holonic) 全体(ホロス)と個(オン)の合成語。
すなわち組織と個人が有機的に結びつき全体も個人も生かすような形態を言う。
生物は個々の組織が自主的に活動すると同時に独自の機能を發揮する一方でそう
した個が調和して全体を構成する (小学館「カタカナ語の事典」より)

